山都の栄華のものがたり

The glory of Yamato

阿蘇氏の居館「浜の館」と
居城(詰めの城)「岩尾城」〈模型〉
山都町観光文化交流館
(やまと文化の森)展示物

2018年に創建一千年を迎えた「小一領神社」

はるか昔、いにしえの時代。山都町一帯は強大な一族によって統治されていました。その名は阿蘇氏。中世の肥後国は阿蘇氏、相良氏、菊池氏を代表する勢力によって支配されていました。なかでも阿蘇氏の勢力は大きく、全国に500社に及ぶ分社を持つ『阿蘇神社』の大宮司であり、天皇家、出雲の千家(せんげ)家と並び神話時代から続く名家でもありました。

確かな記述が残されていないため時期は不明ですが、阿蘇氏は南郷谷から矢部郷に移り、戦国時代に入ってから『浜の館(はまのやかた)』と呼ばれる居館を築き、繁栄したと伝えられています。しかし、その存在は伝承として語り継がれるばかりでした。

館の所在を明らかにしたのは、矢部高校(山都町城平)の改築に伴い1973(昭和48)〜1976(昭和51)年にかけて行われた発掘調査です。建物や庭園の跡に加え美しい杯や置物も多数出土し、そのうち21点が国の重要文化財に指定されています。また、高校に隣接した敷地内には阿蘇神社の末社である『矢村(やむら)神社』も現存。阿蘇氏が矢部に居を構える際、ここに白羽の矢が立ったという伝説があります。

近年の刀剣ブームで注目を集めた、山都町入佐に伝わる「蛍丸(ほたるまる)伝説」の登場人物は、阿蘇家最強の武士として名を轟かせたという阿蘇惟澄(これずみ)です。激戦から帰郷した惟澄が眠りにつくと、無数の蛍が太刀に群がり消える、という不思議な夢を見ます。目覚めると、刃こぼれしていた刀が元の姿に戻っていたことから、惟澄は刀を「蛍丸」と名付け、終生大切にしたのだとか。この伝説は地元で今も語り継がれ、全国から愛好家が入佐の地を訪れています。

阿蘇惟豊(これとよ)の時代に阿蘇氏は全盛期を迎えます。その子、惟将(これまさ)〈幼名千寿丸(せんじゅまる)〉の華やかな出陣式の様子は、2018年に創建一千年を迎えた『小一領(こいちりょう)神社』に絵巻物が残されています。

栄華を極めた阿蘇氏でしたが、徐々に衰退。惟将、惟種(これたね)が相次いで亡くなると、わずか2歳の惟光(これてる)が家督を継ぎました。成人当主が不在のなか、薩摩の島津氏の脅威により、惟光と惟善(これよし)の幼い兄弟は浜の館を捨て、矢部の目丸地区へ逃亡。幼い当主を守るため、目丸の人々は棒術を身につけました。それが「棒踊り」という伝統芸能となって今も残っています。

一度は戦国の世に散った阿蘇氏でしたが、加藤清正の取立てにより、1601年には阿蘇惟善が再び阿蘇神社(阿蘇市宮地)の大宮司に復帰。現在も名家として存続しています。

小一領神社蔵 絵巻物(千寿丸の出陣式)
「小一領」の名について、千寿丸が出陣する際、戦勝を祈願して小桜威(こざくらおどし)の鎧一領を奉納したことに由来すると伝えられています。

山都の歴史のものがたり

The history of Yamato

① 八朔祭「大造り物」（撮影：上田 幸洋）

日向往還（ひゅうがおうかん）は、現在の熊本県熊本市と宮崎県延岡市を結ぶ旧藩時代の古道です。その起源は遥かむかしにさかのぼり、阿蘇氏が栄華を極めた中世には、既に交易路として活発な往来があったといわれています。参勤交代に使われた“官の道”とは異なり、一般の人々が生活物資を運ぶために切り拓いた“民の道”である日向往還。江戸時代に入ると、豊富な海や山の幸が牛馬の背に積まれて行き交い、それはそれは賑やかな活気に包まれていたそう。中継地である浜町や馬見原（まみはら）は宿場町として繁栄しました。明治時代には客馬車や荷馬車が行き来し、乗り合いタクシーも登場。馬見原を訪れた歌人・若山牧水は「馬見原ハシャレタ町ナリ」と書き記し、馬見原の町並みを賞賛しました。こうした歴史の跡をたどりながら古道を歩く「日向往還歴史ウォーク」が、毎年3月に開催されており、町内外から多くの参加者が訪れています。

日向往還を行き交う人々は物資のほかに、文化や信仰を余すことなく伝え合いました。そうして生まれたのが、庶民の手によって始まり、今もなお親しまれている祭礼の数々です。なかでも浜町商店街一帯を舞台に五穀豊穣を祈願して行われる「八朔祭（はっさくまつり）」は、独特の文化と歴史を伝える町最大の祭りです。地元住民が連合組ごとに団結し、竹や杉などの自然のものだけを使って造り上げる巨大な「大造り物（おおつくりもの）」の引き廻しは、まさに圧巻！ 歴史上の人物や伝説の生き物、動物

② 火伏地蔵祭り「裸みこし」

③ 日向往還「山屋のトンネル」

④ 馬見原「新八代屋」

といった題材をリアルに表現した精巧な造り物を目当てに、約4万人もの見物客が訪れます。また、馬見原商店街で行われる「火伏地蔵祭り」は、約400年前、度重なる大火を鎮めるために始まったといわれています。祭りのクライマックスは、火伏地蔵を乗せた御輿を青年たちが担ぎ、五ヶ瀬川で豪快に水浴びさせるシーンです。

穏やかな里山から険しい山岳地帯、さらには太平洋へとつながる日向往還。在りし日の面影をそのままに留めた“民の道”は、豊かな自然景観と貴重な史跡を満喫できる観光ルートとして、今も愛されています。静ひつな空気が漂う山道と、優しい人の温もりに触れる商店街。さまざまな顔を見せてくれる古道は、山都町の歴史を語るうえで欠かせない存在です。

① 八朔祭「大造り物」
毎年９月の第１土・日曜に開催。各商店街が竹や杉など山野に自生する植物を材料に趣向を凝らして造る3.5m を超える巨大な「大造り物」が有名です。

② 火伏地蔵祭り「裸みこし」
毎年８月後半の土・日曜に開催。火伏地蔵御輿を担いだ勇壮な「裸みこし」が地区中を練り歩きます。

③ 日向往還「山屋のトンネル」
凝灰岩を掘り抜いた素掘りで、“日向往還の山屋トンネル”と言われています。開通年代は不明で、長さ22m、高さ 3.3m。出口には地蔵尊（明治３年）があります。

④ 馬見原「新八代屋」
しょう油造りの蔵元であった新八代屋は、明治時代にはめずらしい木造の３階建てです。現在も地区のシンボルとなっています。

豊かな自然のなかで子育てができる

「豊かな自然・豊かな感性・地域の絆で、子どもの夢ふくらむまち山都町」を基本理念に、町や地域全体で少子化対策、子ども・子育て支援施策を進めています。

自然の中で、季節を感じる生活

町内の学校や保育園には、近くに田んぼや畑があり、四季を感じることのできる自然豊かな環境にあります。子どもたちは日々の生活の中で、季節の花や昆虫に出会い、野鳥のさえずりに耳を傾け、豊かな感性を育てています。

食べ物の尊さを、日常で学ぶ

町内の学校や保育園では、近くの田んぼや畑を借りて、老人会や地域のみなさんと一緒に、米づくりや野菜づくりを体験します。

園児や児童たちは、収穫したお米や野菜を給食で食べたり、お米を羽釜で炊いておむすびを作ったりしながら、食べ物の尊さを学んでいます。

「羽釜で炊いたご飯は、冷めてもモチモチして美味しい！」と、みんなで賑やかにご飯炊きを行う山都みらい保育園の園児たち。竹の器でご飯を炊くこともあります。

山都の幸たっぷりの、贅沢な給食

山都町では、全ての小中学校が、自校方式で調理を行っており、子どもたちは毎日、家庭料理に近い手づくり給食を食べています。食材は、地元産のお米や旬の野菜を使った地産地消に拘っています。時々、個人の農家さんから野菜の差し入れが入ることもあり、地域ぐるみで子どもの食育に取り組んでいます。毎日の献立は、2名の栄養教諭によって作成され、家庭でも真似して作ってもらえるような内容を意識して、バランスの取れた献立を作成しています。食育を学校給食だけで終わらせず、家庭にも繋げる工夫をしています。

また、県の「食育の日」に合わせて設けられた「ふるさとくまさんデー」では、熊本の郷土料理が給食に登場し、子どもたちに郷土料理への興味を促す取り組みも行っています。

月に一度の「ふるさとくまさんデー」では、熊本の郷土料理が登場。この日の献立は、天草の郷土料理「せんだご汁」。サツマイモを練りこんだ弾力のあるお団子が「おいしい！」と大好評でした。

地域全体で子どもを見守り、育てる

近年、少子化は進み続けています。これ以上急激に人口減少が進まないよう、町内からの流出人口を抑制するとともに、町外からの流入人口を増やさなければなりません。そのためには、安心して子どもを産み育てることができる環境を整えるとともに、子どもの成長に応じて、様々なことを「知る」・「学ぶ」機会を提供しています。

保育園から高校まであらゆる教育機関が連携

保育園から矢部高校までの教育機関と地域が連携し、地域の人材や、魅力ある農業及び森林の多面的機能を十分に活かして、様々な教育・学習機会を提供することで、「地域に誇りを持ち幅広い視野で物事を考えることができる子ども」、「山都町の特色を活かす事で山都町のみならず日本の中山間地の将来をも担える子ども」の育成につながる取り組みを行っています。その一つとして、2016年から、公設「山都塾」をスタートしました。

「山都塾」は、町内の小・中・高校生、及び保護者を中心に、山都町の地域の人や自然・歴史文化・産業・伝統や技などを学び、受講生の夢の実現や町の未来創造を目指す公設塾です。「ふるさと学」と「未来学」があり、様々な分野の講座を開催しています。

子ども医療費助成制度

子どもの疾病の早期治療を促進し、その健康の保持及び健全な育成と子育て支援を図ることを目的として、新生児から18歳の年度末までの医療費の助成を行っています。

絵本カーニバル in 山都町
2006年にスタートした絵本の展示やワークショップを実施するイベントで、親子のコミュニケーションを図る場を提供しています。毎年夏に開催されています。

スクールコンサート
1997年にスタートしたコンサートではNHK交響楽団をはじめ著名な音楽家を招いて、山都町内の小中高校生に、より高い芸術環境を無償で提供しています。山都町に住む有志によって設立された公益基金「時の橋」の主催で毎年開催されています。

山都塾（山の都魅力向上・人材育成プロジェクト）
2016年7月にスタートした、山都町の人や自然・歴史文化・産業・伝統や技などを学び、受講生の夢の実現や町の未来創造を目指す公設塾。地域住民や町外からのゲストが先生となります。

山都町子育て支援センター
子育てに関する総合的な支援活動を担う施設です。遊びの場、子育てに関する相談や情報提供の場、子育て家族のふれあいの場として、安心して子育てができるように応援していきます。また、ファミリー・サポート・センター事業も行っています。

病後児保育事業
家庭で保育ができない保護者に代わり、病気の回復期にある山都町に住所を有する1歳～小学3年生のお子さんを一時的に預かってもらえます。

私たちの町「山都」

子育て世代編

近年、山都町では急激な少子高齢化と人口減少が続いています。子を産み育てる中心世代である20～30代女性の人口は年間約20人、それに伴う年少者人口は年間約40～60人程度の減少を続けています。安心して子を産み育てることができる環境づくりを行うことで子育て世代の町内からの流出を抑制すると共に、町外からの流入を促すことが重要です。

実際に山都町で子どもを産み育てている子育て世代の女性は、山都町での子育てにどんな魅力を感じ、また、どんな課題があると感じているのでしょうか。出身地や職業、子どもの年齢などがそれぞれ異なる、山都町で子育て中の3名の女性に話を聞きました。

山都町で子育てをしていて「山都町ならでは」と思うのはどんな時ですか

大久保 留美さん（以下「大」）

すぐ近所に山の達人がいらっしゃって、子どもたちに鳥や花の名前を教えてくださるんです。すると今度は、「これは〇〇の花だよ」と、子どもたちが私に教えてくれたりして（笑）

夕方、いっしょに夕日を眺めたり、冬になると雪遊びを楽しんだり・・・上の2人が小学生なので部活や習い事もさせていますが、毎日がバタバタと過ぎて行くということはなく、ゆったりとした気持ちで子育てが出来ていると思います。

佐藤 沙季さん（以下「佐」）

休日に子どもたちと散歩をしていたら、保育園児の長女が道端に落ちていた毬栗（いがぐり）を足で上手に剥いたんです。私は子ども時代にそんな事したことなかったし、毬栗の剥き方なんて知らなかったのでびっくりしました（笑）きっと、保育園のお散歩で先生に教わったんだと思いますが、**そうやって自然豊かな環境の中で毎日いろんなことを学んでいるんだなと思うと、嬉しくなります。**

石井 陽子さん（以下「石」）

子どもたちと過ごせる年月って、意外と短いと思うんです。いずれ大人になって出て行きますから。「お母さん、夕日がすごいよ！」とか、「お母さん、星がきれいだよ！」と言われて一緒に眺めたりする時間が、とても貴重だと感じます。**山都町は四季を感じることのできる豊かな自然に囲まれていて、子どもたちがその中で感動したり楽しんだりして子ども時代を過ごせていることは、素敵なことだと思います。**

学校や保育園についてはどんな感想をお持ちですか

大 給食がすごくいいと思います。町内全ての小・中学校に給食室があり、子どもたちは毎日、地元野菜を使った手づくりの給食を食べています。子どもたちが田植えや稲刈りをして収穫したお米を炊いたご飯が出る時期もあります。時々農家さんから野菜の差し入れもあるらしく、そのことが給食の時間に校内放送で流れるので、子どもが帰宅後「今日は〇〇ちゃん家の玉ねぎが給食に出たよ」と話してくれることもありますよ。

佐 うちはまだ保育園児ですが、保育士の先生方がとても親身に接してくれるのが嬉しいです。町全体で子どもが少ない分、一人一人をしっかりと見てもらえているという実感があります。私たち母親の子育ての相談にも、ていねいに対応してもらえるので、保育園にはとても満足しています。

石 長女が高校生ですが、高校進学の時はちょっと悩みました。山都町から通える高校は限られているので、選択肢が少ないという点で子どもの可能性を狭めているのかなと。でも、本人が自分の意思で山都町にある県立矢部高校への進学を希望しました。私も高校生までは地元にいてほしいと思っていたので嬉しかったです。少人数の高校なので、先生が一人一人に親身になって対応してくださるという話を聞いており、不安なことはありませんでした。どこへ行ってもやる勉強は同じで、最終的には本人のやる気が一番大切ですから。

実際、とてもいい環境で高校生活を送っていると思います。

山都町での子育てで不便だと思うことはありますか

石 公共交通機関が少ないので、子どもたちの移動は全て親の車に頼るしかありません。そのため、子どもたちにとっては、行動の選択肢が狭まってしまっていますね。いろんな面で、選択肢が少ないという点が残念です。

佐 そんな話を、他のお母さん方からもよく聞きます。子どもが小学生になったら何か習い事に通わせたいと思っているので、送迎など親の覚悟が必要ですね（笑）

うちは子どもが3人ともまだ保育園児なのですが、休日などに町内で遊ばせる場所が少ないと感じています。小学生くらいになれば、どこででも自由に遊べるようになるんでしょうね。

大 例えば公園のような場所があればいいですよね。そこに集まってきた子ども同士の交流や、ママ同士の交流も生まれるんじゃないでしょうか。子育て世代の人たちが、そんな風に気軽に集える場が意外と少ないので、あるといいなと思います。

佐 今、4人目の子どもを妊娠していますが、町内には産科がないので、片道1時間以上かけて町外の病院に通っています。冬場は道路が凍結したり雪が積もることもあるので、万が一のことを考えて不安になることもあります。

最後に、山都町での子育ての魅力を教えてください

大 先ほど学校の給食がいいと言う話をしましたが、給食だけに限らず、山都町は高冷地なので野菜が美味しく、食に恵まれていますね。**無農薬で作っている農家さんも多いので子どもに安心して美味しい野菜を食べさせられるのも嬉しいところです。**

佐 保育園が素敵です。自然の中を散歩したり、畑で野菜の収穫をしたり、たくましく育っている姿を見ると嬉しくなります。

石 当たり前のように目の前に広がる雄大な自然の中で、子どもたちと過ごすことが出来ているところです。一緒に四季を感じながら暮らす一日一日が、宝物です。

PROFILE

大久保 留美さん
ご本人・ご主人共に、生まれも育ちも山都町。職業は接客業。ご主人は大工さん。1歳・9歳・11歳のお子さんとの5人家族。夫婦で地元の和太鼓サークルに所属し、地域活動にも積極的に参加している。

佐藤 沙季さん
宇城市出身。山都町で農業を営むご主人と結婚。農家の嫁として、家事、育児、農業の手伝いをしている。0歳・3歳・5歳のお子さん、ご主人のご両親との7人家族。平成30年の春頃、4人目のお子さんを出産予定。

石井 陽子さん
ご本人・ご主人共に、福岡県出身。17歳・12歳のお子さんとの4人家族。2004年に、自然豊かな山都町の景色に魅せられて家族で移住。ご主人が経営する歯科医院の事務を行う傍ら、図書館や学校、NPO団体でのボランティア活動にも積極的に参加している。

「山の都」の特性を活かした魅力ある産業づくり

森林資源を活かした産業振興

山都町の38、732haに及ぶ広大な森林では、住宅建材などへの利用を目的に木材の搬出が積極的に行われています。森林面積の約60%は人工林であり、バイオマス(動植物由来の有機資源)としての活用など新たな展開が期待されています。

農産物ブランド化推進事業

豊かな自然の中で生産される農産物に付加価値を付け、山都町農産物の認知度を高めることを目的として、情報発信や新商品の開発、販路拡大に取り組み、山都町農産物のブランド化を確立する取り組みを行っています。

約40年にわたる有機農業の歴史

山都町では、安心・安全な農産物を生産する環境保全型・地域循環型の農業に先進的に取り組んでいます。近年、有機農業に関心がある人々の新規就農も増えており、町への定住促進にもつながっています。有機農業者により協議会が組織され、有機農業の推進、物産展や産地見学会など生産者と消費者との距離を近づける取り組みが行われています。

福岡県岩田屋での山都町フェアの様子

農産物を使用した加工品を「適正な価格で売る」ための知識を獲得し、「売れる農産物、加工品づくり」を行うための取り組みを、積極的に行っています。

県内自治体初の「くまもとグリーン農業推進宣言」

山都町では、2017年11月、熊本県が推進する「くまもとグリーン農業」に町を挙げて取り組むため、県内の自治体として初めて「くまもとグリーン農業推進宣言」を行いました。「くまもとグリーン農業」は、土づくりを基本に化学肥料や化学合成農薬の使用を減らし、熊本の宝である「地下水」と「土」を守り育てる農業を広げる取り組みです。山都町では町内の専業・兼業農家や飲食業者等へ協力を呼びかけることで「くまもとグリーン農業」への取り組みを拡大していきます。

新規就農者への支援

国の農業次世代人材投資事業をはじめとした各種支援制度を活用し、新規就農者の増加を図っています。平成24年度からの5年間の新規就農者数は49組(64名)となっています。

有害鳥獣対策

有害鳥獣に対処するため、計画的な防護柵の設置や捕獲を行うことにより、被害の防止に取り組んでいます。また、捕獲した鹿や猪の肉等の利活用を推進するため、2017年に「ジビエ工房やまと」を建設し、運営を始めました。

産地見学会「人参収穫体験」

「食」×「農」×「観光」ビジネスモデルの創出に向けた「食農観光塾」

「食農観光塾」は、山都町の産業振興を図るため、各分野の若手リーダーを育成し、農業を起点として「食」「農業」「観光」という視点で事業を捉え、地域を担う各事業者を巻き込みながら実働に移す取り組みです。

山都町のような中山間地においては、大規模な農業経営により所得の向上を図ることは非常に困難です。そこで気候や風土を生かした加工品の製造や販売、さらには観光農園や農家民泊など、農業に付加価値を付けた農業経営を行いながら、集落営農などの組織化により集落の維持を図る取り組みが必要であり、そこには、地域のリーダーとなる人材が必要となってきます。

このような状況から、この食農観光塾では、農業を起点とした、「食」・「農」・「観光」を絡めた受け入れ体制の構築や、そうした地域のリーダーを発掘し、地域とともに一体となって集落の維持や農業の所得向上を目指して実働する意欲のある人材を育成しています。

ジビエ工房やまと
山都町米生にある工房では、地元猟友会の方々から持ち込まれる鹿や猪を解体し、商品化する取り組みを行っています。

九州中央自動車道開通と、九州のへそに位置する「地の利」

平成30年度には山都町の西側玄関口である北中島地区に九州中央自動車道の開通が予定されており、その数年後には矢部ICの開通が予定されています。九州の中央を東西に連絡する横軸となる九州中央自動車道は、循環型高速交通ネットワークとして、大規模災害時の救助・物資の輸送や、救急救命医療施設への搬送時間短縮につながる「命の道」として、路線住民の安全・安心の確保に大きく貢献します。

また、九州のほぼ中央に位置する山都町に高速道路が開通することで、観光入込客の増加や、物流の利便性が飛躍的に向上することが予想されます。山都町の産業が発展するよう、食農観光塾等の取り組みを通し、官民一体となって受け入れ体制を整えておく必要があります。

ブルーベリー摘みの様子

観光農園や農家民泊など、気候や風土を生かし、農業に付加価値を付けた農業経営を行っている農家も多く、観光客も多く訪れています。

レストランバスの様子

食農観光塾をきっかけに設立された、「株式会社 山都でしか」。山都の食材を使った料理を提供するレストランバスの運行を主催するなど、山都の資源を活かし、「**山都でしか**できないワクワクを！」をコンセプトに活動しています。

食農観光塾をきっかけに設立された「(株)山都でしか」のメンバー